

I. はじめに

発達障害児の家族は、子どもにとって最も身近な支援者であると同時に、家族自身も支援を必要としている当事者でもある。しかしながら、発達障害児の家族支援の現状には、地域や自治体間の支援格差や、家族支援に関する専門人材不足という課題が存在している³⁰⁾。また、発達障害児の子育てにおいては、ストレスや孤独感、自責の念といった複数の心理的支援のニーズが存在している。そのため、発達障害児の家族支援においては、親自身が「学べる場」と「支えられる場」が必要とされている³⁰⁾。そして、これらの課題解決には、すでに地域に存在する人的資源の「強み」を活かした親支援プログラム開発・実践に取り組むことが一助となると思われる。しかし、このような視点に立つ家族支援の実践的研究は、ほとんど行われていないという現状がある¹⁴⁾。

制度面においても、地域における家族支援の重要性が示されている。2004 年に制定された発達障害者支援法は、家族等への支援に関する第 13 条において、都道府県・市町村が家族に対する「相談・助言等」の支援を適切に行うよう努めることが定められている。また、2016 年の改正では、新たに「発達障害者の家族が互いに支え合うための支援等」が追加された。このことは、発達障害児の家族支援においては、専門家による相談・支援と同様に、当事者である家族相互の支え合い、すなわち「ピアサポート」が有効であるとの認識を示していると言える。

また、2018 年には「発達障害児者及び家族等支援事業」が創設され、家族支援の一層の強化が図られた。本事業において、都道府県・市町村には以下の推進が求められている。家族の相互の支え合いを目的とした「ペアレント・メンター」の養成、家族の養育スキル向上を目的とした「ペアレント・トレーニング」および、「ペアレント・プログラム」の実施である²⁵⁾。これにより、家族支援の具体的な方法が示された。

加えて、2024 年改訂の児童発達支援ガイドラインでは、「家族のエンパワメント」を重視する方向性が示された。具体的には、障害のある子どもの家族支援について「家族自身が内在的に持つ力を發揮できるよう、エンパワメントを前提とした支援をすることが重要である」と明記されている²⁴⁾。

このような発達障害者支援法制定以降の流れを踏まえると、現在の発達障害児の家族支援においては、専門家による相談・助言にとどまらず、家族同士のピアサポートや、家族自身が潜在的に持っている力を引き出すエンパワメントの視点が求められていると言えるであろう。しかし、現時点で発達障害の家族のピアサポートやエンパワメントに注目した国内の研究は未だ僅かに留まっている^{12) 38) 43)}。

そこで本稿は、発達障害児の家族支援について、エンパワメントとピアサポートという 2 つの視点から検討を行い、地域において持続可能なエンパワメントの実践に向けた展望を示すことを目的とする。

II. 発達障害児の家族支援におけるエンパワメント

1. エンパワメントの歴史と定義

「エンパワメント」は、「権利や権限を与えること」という意味の法律用語として 17 世紀に使われ始め、第二次世界大戦後は、米国の公民権運動、カウンセリング、フェミニズム運動などの社会変革活動

を契機に広く使われるようになった²⁸⁾。その後、社会福祉、発展途上国の開発、医療と看護、教育など様々な領域で使用され、狭義の法律用語から、広義の社会的プロセスを表す概念として用いられるようになっている²⁷⁾。

上述の通り、「エンパワメント」は様々な分野で用いられてきた概念であるため、その定義は非常に難しいとされる^{27) 35)}。ここでは、3人の研究者の定義を取り上げ、エンパワメントの定義における多面性を整理したい。

久木田（1998）²⁷⁾は、「すべての人間の潜在能力を信じ、その潜在能力の発揮を可能にするような人間尊重の平等で公正な社会を実現しようとする価値」と定義し、「自らコントロールしていく力を奪われた人々がそのコントロールを取り戻すプロセス」と述べている。

三島（2007）³²⁾は、「自らの内なる力に自ら気づいてそれを引き出していくこと、その力が個人・グループ・コミュニティの三層で展開していくこと」と定義し、従来の専門職からの一方的なサービス・システムの在り方に意義を唱えている。

安梅（2004）³³⁾は、「元気にする、力を引き出す、絆を育む、共感ネットワーク化」と定義し、専門家の役割を当事者が主体的に問題解決に取り組むための環境整備と捉えている。加えて、本来のエンパワメントとは、「当事者が自らの力を *to enable* 信じ、より良い方向に向かって自発的に取り組むことを目指す、『やればできる』と思うことである」と述べ、エンパワメントと動機付けの関連を指摘している。

上記3名の定義を踏まえると、エンパワメントとは「失われた力の回復」や「潜在的な力への気づきと活用」を通じて、当事者の自己への信頼と主体性の回復を目指す概念と定義づけられる。そのため、エンパワメントの視点に立つ家族支援においては、専門家が家族の持つ力を信頼すること、家族が自らの力に気づいてその力を発揮していくことが必要不可欠な要素と言えるであろう。

2. エンパワメントの構造

（1）エンパワメントのプロセス

エンパワメントは、プロセスを含む概念であることが多くの研究者によって指摘されている^{6) 33) 45) 50)}。

エンパワメントが生じるプロセスについて久木田（1998）²⁷⁾は、その過程には一定の順序性があり、順序を無視したり、逆に行おうとしてもエンパワメントは起こらないと述べている。加えて、外部からの働きかけによってのみ起ころのではなく、個人の意思や自己の潜在能力への気づき、自信の形成などがあつてはじめて生じる、極めて心理的側面の強いプロセスであるとしている。

中村（2004）³⁵⁾は、エンパワメントを促進する要因として他者の存在に重きを置いている。具体的には、エンパワメントのプロセスは内側から生じてくることが重要であるが、外部からの働きかけがない状態では変化は生じにくく、エンパワメントも起こりにくい。そのため、個人が自らをエンパワーしていく過程を、他者が促進していくことが重要と述べている。

これらの指摘を踏まえると、エンパワメントのプロセスとは、他者との「相互作用」を通じて自己の潜在能力への気づきや自信の形成といった「心理的変化」が生じる過程であり、その促進には他者の存在が必要であると言える。

(2) エンパワメントの多次元性とエンパワメント相乗効果モデル

エンパワメントは、個人・対人関係・集団・組織・社会などを含む多次元的な概念である^{15) 39) 46) 57)}。安梅（2004³⁾；2014⁴⁾；2024⁵⁾）は、「エンパワメント相乗効果モデル」を提唱し、継続的かつ効果的なエンパワメントには「セルフ（自分）」「ピア（仲間）」「コミュニティ（組織・地域）」の3つの相乗効果が必須であると述べている。本モデルにおいて、セルフ・エンパワメントは「当事者が自らの力を引き出すこと」、ピア・エンパワメントは「仲間と一緒に元気になる、力を引き出し合うこと」、コミュニティ・エンパワメントは「場全体の力を引き出し、活性化すること」と定義される。本モデルの特徴は、3つの次元の相乗効果を重視していること、特に当事者同士の相互援助的な「ピア」の力に注目している点にあると思われる。この視点に基づけば、発達障害児の家族への支援においても、従来の専門家—当事者の支援関係にとどまらず、セルフ（家族自身）・ピア（家族同士）・コミュニティ（グループや地域）それぞれの力を引き出し、その相互作用によってエンパワメント効果を高める支援方法の開発が求められるであろう。

(3) エンパワメントの評価の方向性

上述の通り、エンパワメントは多面的、多次元的な概念であることから、その評価についても複数の視点から研究が行われてきた。

エンパワメントの評価には、「結果（outcome）を見る」立場と「過程（process）を見る」立場の2つの議論が存在している³⁾。また、プロセスが「プロセス」と「アウトカム」を内包しているという捉え方⁴⁵⁾や、エンパワメントはプロセスであるとともに結果でもあるという捉え方⁵⁰⁾も存在しており、見解が分かれている。同時に、エンパワメントは多次元的な概念であるため、その成果指標については、個人レベル、対人関係レベル、地域システムレベル等、複数の視点で捉える必要性がある³⁾。

いずれにしても、家族支援におけるエンパワメントの評価は、一時点あるいは、一側面からのみ捉えられるものではなく、エンパワメントの変化のプロセスについて量的・質的側面から捉えることが必要と言えるであろう。

(4) エンパワメントを促進するための専門家の役割

エンパワメントの促進において、専門家にはどのような役割が求められるのであろうか。

安梅（2004³⁾；2014⁴⁾）は、エンパワメントにおける当事者の主体的な問題解決を重視し、専門家の役割として、①「コミュニケーション」を図ること、②「動機付け」を行うこと、③「科学的な根拠」を与えること、の3点を挙げている。

麻原（2000）⁶⁾は、エンパワメントの前提は相互作用であり、「援助する」という一方向的な関わりではなく、対象者（当事者）と専門家が協働関係にあることが重要であると指摘している。加えて、専門家の支援の在り方として、対象者と他者との相互作用が生じる場の提供により、エンパワーのプロセス

を支えることの重要性について言及している。

これらの指摘を踏まえると、エンパワメントを促進する専門家の役割とは、①当事者の主体性を尊重しつつ、相互作用による問題解決の

場を共に作ること（協働）、②家族の主体的な問題解決を動機づけ、科学的な根拠を提供し、活動を意味づけていくこと（専門的知識・技術の提供）であると考えられる。

3. エンパワメントの視点に立つ家族支援への示唆

本章では、発達障害児の家族支援におけるエンパワメントの概念と構造について整理を行った。本章の議論を踏まえると、エンパワメントの視点に立つ発達障害児の家族支援とは、専門家が一方向的に力を与えるものではなく、家族が自らの力に気づき、その力を發揮していくプロセスを「協働」によって支えるものと言える。また、エンパワメントの促進には、個人の内的な気づきだけでなく、他者との「相互作用」が不可欠な要素となる。特に「エンパワメント相乗効果モデル」に示された、持続的で効果的なエンパワメントには、セルフ（家族自身）・ピア（家族同士）・コミュニティ（グループや地域）の3つの相互作用が生じることが重要である。したがって、今後の家族支援においては、従来の「専門家主導の支援」から「当事者主体の支援」へのパラダイムの転換による当事者と地域の力を引き出す支援が求められるであろう。その際、専門家には家族に内在する力を信頼し、当事者である家族と専門家が対等なパートナーとして協働する姿勢が必要となる。さらに、家族相互の「ピア」の力に注目し、その力が活かされる場を地域の中に創り出すことが具体的な支援の鍵となるであろう。

以上を踏まえ、次章では、当事者の主体的かつ相互援助的な活動である「ピアサポート」に焦点を当て、エンパワメントとの関連について検討を行う。

III. 発達障害児の家族支援とピアサポート

1. ピアサポートの定義と有効性

ピアサポートとは、「共通の問題や環境を経験した人が対等な関係性の仲間として相互に支援をしあう活動」と定義される¹⁸⁾。その一形態であるセルフヘルプグループ⁴⁰⁾には、疾病や障害を持つ本人のグループに加えて、家族会や親の会などの家族のグループも含まれる。セルフヘルプ（Self help）には、「自助」と「相互援助」という2つの意味があり、共通した課題を抱える「当事者であること」が重要な意味を持っている²⁶⁾。すなわち、ピアサポートは、本人もしくは家族の疾病や障害によって「支援される立場」に置かれた人々が、その経験を基盤として、相互に「支援する立場」へと役割の転換が起ころる場と言える。

こうしたピアサポートの有効性は、「ヘルパーセラピー原則：Helper-Therapy Principle⁴¹⁾」と「経験的知識：Experiential Knowledge⁷⁾」という概念によって説明される¹⁾。「ヘルパーセラピー原則」とは、「援助をする人がもっとも援助を受ける」という意味であり、相互援助的なグループにおける最も強力なメカニズムの一つとされる¹¹⁾。また、「経験的知識」とは、当事者が自らの経験を通じて得た知識で

あり、当事者相互の問題解決を助ける具体的かつ実践的な知識である⁷⁾。ピアサポートでは、これまで自らの存在価値に限界、もしくは負の価値を与えてきた体験が、「経験的知識」として自らの存在価値を高める「付加価値」となるのである¹⁾。

このような機能をもつピアサポートのエンパワメント効果は、海外の研究において以前から明らかにされてきた^{2) 7) 22) 44) 47)}。しかしながら、国内の発達障害児の家族を対象としたピアサポートの実践的研究は未だ限られており、十分とは言えない現状がある^{12) 29) 38) 43)}。

2. 発達障害児の家族によるピアサポート活動

発達障害児の家族支援におけるピアサポートの重要性は、これまで多くの研究者によって指摘された^{8) 23) 52)}。例えば、障害のある子をもつ親の障害受容には、専門家からの助言よりも、同じように障害児を育てている母親からのサポートが有用であるとの報告や²¹⁾、家族の気持ちの支えを専門家だけで充足することは難しく、同じ立場の家族による相互の支え合いが必要との指摘もある⁵⁶⁾。これらの先行研究を踏まえると、当事者同士のピアサポートには、専門家による支援とは異なる価値が存在していると言えるであろう。

ここでは、発達障害児の家族によるピアサポート活動として「親の会」および「ペアレント・メンター」を取り上げる。

(1) 親の会

「親の会」は、発達障害児の家族支援の担い手として、地域に根ざした活動を行ってきた。1990年に設立された全国組織である特定非営利活動法人 全国 LD 親の会⁴⁹⁾ の他にも、各地域の親が自然発的に集まり自助的な活動を行ってきたグループが存在している。東村（2006）¹³⁾ は、地域の障害児親の会の意義として①親の多様な経験がグループの中で蓄えられ、アドバイスに活かされること、②親にとって必要な時に頼れる「基地」となっていること、③外部の親にも情報を発信し、親と関係者をつなぐ取り組みを行っていることを挙げている。しかし、現状の課題として、会員数の減少や、地域間格差、地域で孤立しサービスにアクセスできずにいる家族への支援の必要性が指摘されている⁵¹⁾。そのため、今後は家族が親の会の情報にアクセスしやすくなる方法の検討に加え、専門家が支援を必要とする家族と親の会とのつなぎ手となることも求められるであろう

(2) ペアレント・メンター

ペアレント・メンターとは、「発達障害児の子育て経験のある親であって、その育児経験を活かし、子どもが発達障害の診断を受けて間もない親に対して相談を行う人」²⁵⁾ である。井上（2017）¹⁹⁾ は、ペアレント・メンターの特徴として、同じ体験をしてきた親としての「高い共感性」と、地域の教育・医療・福祉などサービスを理解した上での「ユーザー視点からの情報提供」を挙げている。加えて、ペアレント・メンターは当事者による当事者支援の仕組みであり、専門家の相談では得られない特徴があること、専門支援機関や行政によるメンター活動へのバックアップにより、当事者視点で途切れない家族支援が地域に根付き、広がっていくことを指摘している。

しかし、ペアレント・メンターによる支援には、大きなメリットと同時に、メンターへの過度の依存やメンター自身の大きな心理的負担など、無視できないデメリットも存在する⁵⁵⁾。そのため、メンターが持つ「強み」を活かすには、当事者の主体性を尊重しつつ、専門家がメンター活動をバックアップしていく協働の在り方も重要なとなるであろう。

3. 発達障害児の家族支援におけるピアサポートの有効性

上述の「親の会」や「ペアレント・メンター」の有効性については、主に質的研究によって検討されている（表1）。本節では、表1の先行研究に基づき、エンパワメントに影響を及ぼす「ピアサポートの力」について、「経験に基づく共感と安心感」、「経験的知識の共有」、「将来への見通しの獲得」、「経験的知識の再価値化」の4点から整理する。

まず、親の会は「共通の経験に基づく共感と安心感」が得られる場として機能している。八峰・小林（2014）⁵³⁾は、親の会が対等な関係の中で自分の体験や気持ちを存分に話し、それを他者がありのままに認める場であると述べている。こうした場において、同じ悩みを持つ親と問題を共有することは参加者に安心感をもたらし¹⁶⁾、自らの課題へ向かう力を蓄えていく⁵³⁾。宋・劉（2021）⁴⁸⁾は、このようなプロセスを経て親自身が得た「視野の広がり」や「心理的負担の軽減」といった肯定的感情が、結果として母子関係や家族関係の構築にも良好な影響を及ぼしていることを報告している。

次に、親の会やペアレント・メンターとの交流の場では、それぞれの子育て経験を通じて得られた「経験的知識の共有」が行われる。八峰・小林（2014）⁵³⁾は、親の会が互いの体験に基づく情報を伝え合うことが具体的に役立つ支援となることを報告している。特に、メンターのような経験者の知恵や工夫は、経験の浅い親にとって実際の子育てに役立つ情報と捉えられている⁹⁾。

また、親の会やペアレント・メンターとの出会いは、「将来への見通しの獲得」にもつながっている。発達障害児の子育てにおいては、将来への不安感が強いことが指摘されているが²³⁾、これまで発達障害児を育ててきた”先輩“の存在は、その軽減に大きく貢献する。藤田ら（2016）⁹⁾、松井・大河内・田高・有梓・白谷（2016）³¹⁾は、親の会等で経験者の話を聞くことや、その知恵や工夫に触れることで、親が将来の見通しを持てるようになることを報告している。また、メンターとの関わりは、単に見通しを与えるだけでなく、子どもの特性理解や「よさ」にも注目できるようになる効果を持つ³⁴⁾。すなわち、親の会やペアレント・メンターにおけるロールモデルとの出会いは、経験の浅い親にとって、不安を軽減し前向きな養育態度を獲得する有効な契機となる。

最後に、もう一つの特徴として、ピアサポートは支援を受ける側だけではなく、支援をする側にも「経験的知識の再価値化」という効果をもたらすことが指摘される。松井ら（2016）³¹⁾は、親の会における相互の支え合いを通じて、支援を受けていた母親自身がやがてロールモデルへと成長していく過程を報告している。支援の受け手から支援の担い手になる意義は、井上・奥田（2020）²⁰⁾が示唆するように、メンター自身の過去のつらい経験が、他者への支援を通じて共感や肯定的フィードバックを得ることで、「経験的知識」として価値づけされる点にある。これは、当事者同士の支援が双方にエンパワメントをもたらす相互作用を含んでいることを示している。

表1 発達障害児の家族支援におけるピアサポートの有効性を示している論文（種類別・年代順）

ピアサポートの種類	著者 発行年	言及している内容	データ収集方法
親の会	堀家(2014)	・親の会における知識やスキルの提供により自信がつく ・同じような子育ての悩みを持つ親との問題の共有による安心感が得られる	アンケート調査
	八峰・小林(2014)	・対等な関係の中で自分の体験や気持ちを存分に話すことができ、それを他者がありのままに認める場である ・互いの体験に基づく情報を伝え合うことが具体的に役立つ支援となる ・参加者が自らの課題へ向かうだけの力を蓄えられる場である	インタビュー調査
	松井ら(2016)	・子育てにおけるロールモデルに出会い、将来の見通しが持ちやすくなる ・相互の支え合いを通じて、母親自身がロール自身へ成長する	インタビュー調査
	宋・劉(2021)	・親自身の「視野の広がり」、「心理的負担の軽減」といった肯定的感情により母子関係や家族関係の構築に影響を及ぼす	インタビュー調査
ペアレントメンター	虫明・高橋(2016)	・発達障害と診断を受けたばかりの子の母親が、メンターとの出会いを通じて、精神的負担が軽減し、子どもの特性理解や良さに注目できるようになった	交換日記の分析
	藤田ら(2016)	・経験者の話を聞くことで先の見通しを持つことができる ・経験者の子育ての知恵や工夫が自分の子育てに役立てられる	グループ活動 参加者の発言
	井上・奥田(2020)	・メンター自身にとってつらかった経験が、他の親からの共感や肯定的なフィードバックの積みかさねにより「経験的知識」として価値づけられる	アンケート調査

4. ピアサポートの力を活用した家族支援への示唆

本章では、ピアサポートの定義、発達障害児の家族によるピアサポート活動、およびその有効性について整理した。親の会やペアレント・メンターによるピアサポートは、当事者にとって専門家による支援とは異なる価値が存在する。それは、共通の悩みや経験を持つ親同士ならではの「共通の経験に基づく共感と安心感」や、経験を通じて得られた具体的かつ実践的な「経験的知識の共有」である。また、発達障害児の子育て経験者というロールモデルとの出会いは、経験の浅い親に「将来への見通し」を与える、養育不安を軽減する効果をもたらすであろう。さらに、ピアサポートの特徴は、支援の受け手だけでなく、支援の担い手にも肯定的な影響を与える点にある。支援の担い手となることで、過去の困難な経験が「経験的知識」として「再価値化」されるプロセスは、「ヘルパーセラピー原則」によって裏付けられる重要な機能である。しかし、こうした活動にはメンターへの心理的負担などの課題も指摘されている。ピアサポートの力が有効に働くための専門家の役割は、当事者の主体性を尊重しつつ、協働という形で技術的・心理的なバックアップを行っていくことであろう。

IV. 地域における持続可能なエンパワメントの実践に向けて

前章までは、発達障害児の家族支援について、エンパワメントとピアサポートという2つの視点から検討を行ってきた。これまでの議論を踏まえると、地域において持続可能なエンパワメントを実践するためには、当事者と専門家が協働し、地域に存在するピアサポートの力を活用する方法の検討が必要と考えられる。そこで本章では、(1)当事者と専門家との協働による親支援プログラムの開発と実践、(2)地域における人的資源の活用、(3)家族支援を通じた当事者と地域のエンパワメント、という3つの視点から考察を行う。そして、地域を基盤としたこれらの取り組みを通じて、発達障害児の家族支援におけるエンパワメントの実現に向けた方向性を提示したい。

1. 当事者と専門家との協働による親支援プログラムの開発と実践

第1の視点は、「当事者と専門家との協働による親支援プログラムの開発と実践」である。これは、「当事者の視点を取り入れたプログラム」と「当事者との協働で実施可能なプログラム」という2つの要素が含まれる。例えば、従来から取り組まれている行動理論に基づくペアレント・トレーニングは、子どもの行動上の問題の改善、家族の養育スキルの向上や養育態度の変化、抑うつ度の低減といった有効性が数多く確認されている^{10) 36) 37)}。その一方で、参加後に保護者自身の抑うつ・罪悪感が上昇してしまうケースの報告¹⁷⁾や、知識や養育スキルの獲得だけでは、家族のメンタルヘルスの改善や子育てを楽しむことまでは期待できない^{42) 54)}との指摘もある。しかし、様々な心理的支援のニーズを抱える家族のエンパワメントに取り組むためには、プログラムへの参加が家族にとって成功体験となり、子育てにおける自信や喜びを回復できることが重要である。これらの課題解決には、「当事者の視点を取り入れたプログラム」の開発に取り組むことが有効であろう。具体的には、専門性と当事者にとっての学習しやすさを両立するコンテンツや、家族自身のセルフケアや参加者同士のピアサポートの促進を目指したプログラム構成が必要と考えられる。

また、「当事者と専門家との協働で実施可能なプログラム」開発の例として、既存のペアレント・トレーニングを地域の親の会で実施しやすい内容に修正して提供する方法が考えられる。また、経験者（メンター等）がグループワークのファシリテーターとなり、子育て経験の浅いメンバーと一緒に問題解決に取り組む方法も、両者の相互作用によるエンパワメントを促進する可能性が高い。この他、家族の養育技術の向上を目指したペアレント・トレーニングと、発達障害児の子育て経験者の経験的知識が活かされるペアレント・メンターの要素を組みわせたプログラムの開発は、現状として未だほぼ取り組まれていない²⁹⁾。しかしこれは、専門家が持つ「専門的知識」と当事者が持つ「経験的知識」という双方の「強み」を活かした支援方法であり、今後、実践的研究に取り組む価値は高いと言える。

2. 地域における人的資源の活用

第2の視点は「地域における人的資源の活用」である。既述の通り、親の会やペアレント・メンターは、既に地域に存在する有効な人的資源である。そして、当事者相互のピアサポート自体がエンパワメントの力を持っている。具体的には、ピアサポートによる「共通の経験に基づく共感と安心感」、「経験的知識の共有」は、当事者が持つエンパワメントの源と言える。そして、親の会やペアレント・メンターとの出会いは、子育て経験の浅い親にとって「将来の見通しの獲得」によるエンパワメント効果が期待される。加えて、ピアサポートで生じる相互作用は、経験者にとっても「経験的知識の再価値化」と「ヘルパーセラピー効果」によるエンパワメントの源となる。

同時に、専門家も地域における人的資源の一つである。当事者と専門家の協働による親支援プログラムの実践は、地域の中で「学べる場」と「支えられる場」の提供を可能にする。このことは、地域に根ざした当事者のエンパワメント促進にもつながるであろう。

3. 家族支援を通じた当事者と地域のエンパワメント

第3の視点は、「家族支援を通じた当事者と地域のエンパワメント」である。これについては、安梅

(2004³⁾ ; 2014⁴⁾ ; 2024⁵⁾) が提唱する「エンパワメント相乗効果モデル」が重要な示唆を与える。すなわち、地域において家族のエンパワメントを持続するには、以下の 3 つの相乗効果を視野に入れる必要がある。

- ①セルフ（自分）エンパワメント：家族がプログラムへの参加を通じて、子どもとの関わり方を学ぶと同時に、自分自身をケアする方法を学ぶことで、自分の力に気づき、その力を活用していくプロセス。
- ②ピア（仲間）エンパワメント：仲間と思いを共有し、互いにアイデアを出し合いながら子育てに取り組むことで、仲間の力を借りて互いの力を引き出し合うプロセス。
- ③コミュニティ（組織/地域）エンパワメント：地域の中で親の会などの当事者グループが活動を継続し、ピアサポートの力が發揮されることで、グループや地域に内在する力が活かされるプロセス。

これら 3 つの要素を視野に入れた親支援プログラムを地域で実践していくことが、地域における持続可能なエンパワメントを進める上で重要であろう。そして、このプロセスは、専門家との相互作用が加わることで、よりその効果を高めることができると考えられる。

4. まとめと今後の展望

日々、発達障害児の子育てに向き合う家族にとって、身近な地域にアクセスしやすいサポート資源が存在することは、親の心理的安定や子どもの養育環境向上のためにも極めて重要である。また、地域における人的資源の活用は、発達障害児の家族支援における地域間格差の解決の一助にもつながるであろう。

既に地域に存在する親の会やペアレント・メンター等との協働で親支援プログラムを実践することは、参加者個人への効果に留まらず、グループの問題解決力やサポート力をより高めることに貢献する。このことは、親グループやメンター活動のエンパワメントにもつながると言えるであろう。また、親が仲間（ピア）や親支援プログラムとの出会いを通じて、成功体験を積み重ね、子育てにおける自信や喜びを回復することは、結果として子どもと家族全体のエンパワメントへとつながっていく。さらに、地域に根ざしたピアサポート活動が継続することは、地域の中に相互支援の土壌を作り、エンパワメントの連鎖が起こっていく可能性を秘めている。このような、地域におけるエンパワメントの持続には、当事者と専門家との協働が必要不可欠である。

発達障害者支援法の制定から 20 年が経過し、障害の早期発見や子どもへの早期支援が充実してきた一方で、地域における家族支援の取り組みは未だ十分とは言い難い。その解決の糸口は、専門家が当事者の持つ力を信頼し、「協働によるエンパワメント」という視点を持つことで見出せる可能性がある。

文献

- 1) 相川章子 (2010) : 障害福祉分野における循環的支援に関するモデル構築研究.大正大学大学院研究論集, 34, 138-139.
- 2) Ainbinder, J. G., Blanchard, L. W., Singer, G. H. S., Sullivan, M. E., Powers, E. T.,

- Marquis, J. G., & Santelli, B. (1998). : A qualitative study of parent-to-parent support for parents of children with special needs. *Journal of Pediatric Psychology*, 23(2), 99-109.
- 3) 安梅勲江 (2004) : エンパワメントの科学—だれもが主人公. 日本評論社. pp.2-8, 13-32.
- 4) 安梅勲江 (編著) (2014) : いのちの輝きに寄り添うエンパワメント科学—だれもが主人公 新しい共生のかたち一. 北大路書房, pp.7-14.
- 5) 安梅勲江 (編著) (2024) : 共創ウェルビーイング—みんなでつむぐ幸せのエンパワメント科学—. 日本評論社, pp.6-23.
- 6) 麻原きよみ (2000) : 高齢者のエンパワーメント—文化的見地からのアプローチ. *老年看護学*, 5(1), 20-25.
- 7) Borkman, T. (1976) : Experiential Knowledge : A New Concept for the Analysis of Self-Help Groups. *Social Service Review*, 50(3), 445-456.
- 8) 傳力 (2007) : 自閉性障害のある人の親への支援—ライフストーリーのインタビューを通して一. *生活科学研究誌*, 6, 201-208.
- 9) 藤田久美・岡村隆弘・吉富徹(2016) : 発達障害早期支援システムにおける家族支援プログラムの検討：児童発達支援センターへのペアレント・メンター導入の試み. 山口県立大学学術情報, 9, 135-144.
- 10) 深澤大地 (2017) : 地域の公的機関が協働して実践するペアレント・トレーニングの効果—地域の体制づくりとプログラム実践—. 東京福祉大学・大学院紀要, 8 (1), 15-24.
- 11) Gartner, A.・Riessman, F. (久保紘章訳) (1985) : セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際一人間としての自立と連帶へのアプローチ. 川島書店, pp.115-137.
- 12) 原口英之・井上雅彦・山口穂菜美・神尾陽子(2015) : 発達障害のある子どもをもつ親に対するピアサポート：わが国におけるペアレント・メンターによる親支援活動の現状と今後の課題 精神保健研究, 61, 49-56.
- 13) 東村知子 (2006) : 障害をもつ子どもの親によるピアサポート. ジャーナル「集団力学」, 23, 69-80.
- 14) 肥後祥治・前野明子 (2020) : 発達障害児の保護者へのペアレント・トレーニング実施の日本における現状と課題—地域における実践とスタッフ養成の視点から一. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 71, 89-99.
- 15) 平川忠敏 (1997) : コミュニティ心理学におけるエンパワーメント研究の動向—エンパワーメントの実践面から一. コミュニティ心理学研究, 1(2), 161-167.
- 16) 堀家由妃代(2014) : 発達障害児の親支援に関する一考察. 佛教大学教育学部学会紀要, 13, 65-78.
- 17) 久藏孝幸・高山恵子・内田雅志・川俣智路・福間麻紀・伊藤真理・田中康雄 (2010) : テレビ会議システムによる遠隔地発達支援の取り組み (2) 遠隔ペアレントサポートプログラムの試行. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 110, 105-114.
- 18) 飯田大輔・岡田摩理・大島泰子 (2020) : 精神障害者と家族のセルフヘルプグループに必要とされる専門職の支援—ピアサポートによる効果と課題を踏まえた検討—. 日本赤十字豊田看護大学紀要, 15 (1), 61-68.
- 19) 井上雅彦 (2017) : 発達障害児・者への支援 ペアレント・トレーニングとペアレント・メンターを生かした家族支援. さぽーと：知的障害福祉研究, 64(12), 52-57.
- 20) 井上雅彦・奥田泰代(2020) : ペアレント・メンターにおける自己体験の語りの意味. 自閉症スペクトラム研究, 18(1), 15-20.
- 21) 石本雄真・太井裕子 (2008) : 障害児をもつ母親の障害受容に関連する要因の検討—母親からの認知, 母親の経験を中心として— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1(2), 29-35.
- 22) Katz, A.H. (久保紘章訳) (1997) : セルフヘルプ・グループ. 岩崎学術出版社, pp.41-52.
- 23) 木戸久美子・藤田久美 (2019) : 発達障害児の母親の精神面の健康と育児上の気がかりに関する Framework

- matrix を用いた質的研究 医療と社会, 29, 135-154.
- 24) こども家庭庁 (2024) : 児童発達支援ガイドライン (令和6年7月改定版). こども家庭庁, pp.1-50.
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/0ff6d844-e785-416a-9bbc-194938099218/583292ad/20240709_councils_shingikai_shougaiji_shien_0ff6d844_04.pdf. (2025年12月21日取得)
- 25) 厚生労働省社会・援護局 (2018) : 発達障害児者及び家族等支援事業の実施について 平成30年4月9日付け障発0409第8号厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長通知.
<https://www.rehab.go.jp/application/files/2515/8382/5178/ed5f0b8eb4c8699c4b05040eca4892e6.pdf>. (2025年12月21日取得)
- 26) 久保紘章・石川到覚 (編著) (1998) : セルフヘルプ・グループの理論と展開—わが国の実践をふまえて—. 中央法規出版, pp.2-20.
- 27) 久木田純 (1998) : エンパワメントとは何か.久木田純・渡辺文夫編, 現代のエスプリ 376, 至文堂, .pp.10-33.
- 28) 久木田純・渡辺文夫 (1998) : エンパワーメント—人間尊重社会の新しいパラダイム. 現代のエスプリ, 通号376, pp. 5-9.
- 29) 前野明子 (2025) : 発達障害児の家族支援方法に関する研究の動向—「発達障害児者及び家族等支援事業」における支援方法に注目して—.日本発達障害支援システム学会2025年度研究セミナー・研究大会, 研究発表3-1.
- 30) 前野明子・富原一哉 (2023) : 発達障害児の家族支援の現状と今後の展望—発達障害児の親/保護者にとって必要な支援とは—. 地域政策科学研究, 20, 1-18.
- 31) 松井藍子・大河内彩子・田高悦子・有本梓・白谷佳枝 (2016) : 発達障害児をもつ親の会に属する母親が子育てにおける前向きな感情を獲得する過程 日本地域看護学研究, 19(2), 75-81.
- 32) 三島一郎 (2007) : エンパワメント.コミュニティ心理学会編 コミュニティ心理学ハンドブック. 東京大学出版会, pp.70-83.
- 33) 村上満・山本小百合 (2014) : エンパワメントの概念整理と研究動向 —スクールソーシャルワーカーのエンパワメント構築に向けて—. 富山国際大学子ども育成学部紀要, 5, 193-202.
- 34) 虫明淑子・高橋敏之 (2016).: 幼稚園教育における子どもの成長発達を考慮する親支援の事例研究 -交換日記にみる母親の障害受容の過程-. 保育学研究, 54(3), 20-31.
- 35) 中村和彦 (2004) : エンパワメントの概念およびエンパワメントファシリテーションの検討. 人間関係研究, 3, 1-22.
- 36) 中山政弘 (2014) : 肥前方式ペアレント・トレーニング短縮版開発に関する研究. 福岡県立大学心理臨床研究, 6, 111-118.
- 37) 西村勇人・橋本佳奈・水野舞・佐藤充咲 (2022) : 自閉症スペクトラム症・注意欠如多動症の混合グループに対する短縮版ペアレント・トレーニングの有効性に関する研究.認知行動療法研究, 48(2), 217-224.
- 38) 野上慶子・山根隆宏 (2025) : 発達障害児の親のピアサポートによる家族認知行動療法の実践 発達・臨床心理学研究, 24, 1-8. 神戸大学.
- 39) 野嶋佐由美 (1996) : エンパワーメントに関する研究の動向と課題.看護研究, 29 (6) , 3-14.
- 40) 大島巖 (2013) : 「ピアサポート」というチャレンジーその有効性と課題—精神科臨床サービス, 13(1), 6-10.
- 41) Riessman, F. (1965) : The "Helper" Therapy Principle. Social Work, 10(2), 27-32.
- 42) 坂田和子 (2006) : Parent Training の維持効果について 福岡女学院大学紀要, 7, 9-13.
- 43) 澤屋真樹・磯邊省三・河野喬 (2022) : 発達障害の保護者を対象としたエンパワメントの観点からのインタビュー調査. 人間健康学研究, 5, 55-62.

- 44) 44) Shilling, V., Morris, C., Thompson-Coon, J., Ukoumunne, O., Rogers, M., & Logan, S. (2013) : Peer support for parents of children with chronic disabling conditions : A systematic review of quantitative and qualitative studies. *Developmental Medicine & Child Neurology*, 55(7), 602–609.
- 45) 下山田鮎美・吉武清實・三島一郎・上埜高志 (2002) : エンパワーメント理論を用いた実践活動および研究の動向と課題. 宮城大学看護学部紀要, 5(1) , 11-19.
- 46) 清水準一・山崎喜比古 (1997) : アメリカ地域保健分野のエンパワーメント理論と実践に込められた意味と期待. 日健教誌, 4 (1) , 11-18.
- 47) Singer, G. H. S., Marquis, J., Powers, L. K., Blanchard, L., DiVenere, N., Santelli, B., Ainbinder, J. G., & Sharp, M. (1999) : A multi-site evaluation of Parent to Parent programs for parents of children with disabilities. *Journal of Early Intervention*, 22(3), 217–229.
- 48) 宋知潤・劉眞福 (2021) : 発達障がい児の保護者によるセルフヘルプ・グループの検証 - インタビュー調査からみた親子参加の意義に着目して -. 函館短期大学紀要 (48), 73-79.
- 49) 特定非営利活動法人 全国 LD 親の会 (2022) : NPO 法人全国 LD 親の会 30 年の歩み (資料集) . NPO 法人全国 LD 親の会. https://www.jpald.net/about/pdf/history_document.pdf. (2025 年 12 月 21 日取得)
- 50) 巴山玉蓮・星旦二 (2003) : エンパワーメントに関する理論と論点. 総合都市研究, 81, 5-18.
- 51) 通山 久仁子 (2017) : 特定非営利活動法人 全国 LD 親の会にみる全国組織としての「親当事者」団体の機能. 西南女学院大学紀要, 21, 75-85.
- 52) 植田愛子・小野次郎・古井克憲・武田鉄郎 (2015) : 発達障害のある子どもをもつ保護者支援のありかた—エピソード記述の手法を通して— 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 66, 43-50.
- 53) 八峰なつみ・小林勝年(2014) : セルフヘルプ・グループとしての発達障害児を持つ母親の会 - フォーカス・グループ・インタビュー調査をもとに -. 鳥取大学教育研究論集, 4, 11-21.
- 54) 米倉裕希子・堤俊彦・金平希・岡崎美里 (2014) : 発達障害児のペアレント・トレーニングの有効性に関する研究—家族の感情表出とペアレント・トレーニング 関西福祉大学社会福祉学部研究紀要, 17(2), 17-22.
- 55) 吉川徹 (2011) : 親による親支援のメリット・デメリット. 井上雅彦・吉川徹・日詰正文・加藤香編著, ペアレント・メンター入門講座—発達障害の子どもを持つ親が行う親支援. 学苑社, pp.10-13.
- 56) 吉川徹 (2022) : 発達障害のある人の家族への支援 精神医, 64 (4), 407-414.
- 57) Zimmerman, M. A. (2000) : Empowerment theory : Psychological, organizational, and community levels of analysis. J. Rappaport・E. Seidman (編) *Handbook of Community Psychology*, pp. 43-63.